

進学校における「総合的な学習の時間」の授業実践

マエタカの「総合的な学習の時間」－『知のフロンティア・・・学びの創造』－

1 はじめに

平成15年度より、高等学校でも新しい学習指導要領が実施され、「ゆとり教育」の象徴ともいえる「総合的な学習の時間」が導入された。前橋高校では、その3年前の平成12年度から、総合学習研究推進委員会という校内組織を立ち上げ、実施にむけた準備を始めた。私は、設立時から委員長という立場で係わり、企画立案実施に携って来た。今年度、実施3年目の完成年度を迎え、これまでの前橋高校の取り組みについてまとめた。

学習指導要領では、各学校に大きな裁量が委ねられているが、高等学校での「総合的な学習の時間」は、様々な学校環境があり、小中学校以上に多岐にわたる内容となっているようである。また、中学校以上に、教科担任制の進んだ高校では、「総合的な学習の時間」の授業運営は厳しいものがあるようだ。

平成17年1月、文部科学省主催の平成16年度小学校・中学校・高等学校「総合的な学習の時間」研究協議会の高校部会で、都道府県・政令指定都市の教育委員会の指導主事の先生方に対し、事例発表をする機会をいただき、大きな反響を得た。いま児童生徒の学力低下が全国的な問題となっている。そのなかで、前橋高校の取り組みは、優秀な学力を維持しつつ、さらに学習に対する意欲関心を高め、将来の生徒の自己実現を促す学習活動となっていると認められたようである。従来の教科学習で培う学力と新しい時代を創造するための学力(主体的な学習力)は、方向の異なるものではなく、互いに補完しあい、相乗的な効果をあげつつ、最終的に生徒自身の自己実現に寄与するものでなければならないと考える。

2 本校の現状と課題、そして「総合的な学習の時間」のねらい

本校は平成17年度に創立128年を迎えた群馬県下随一の伝統校である。理想主義に基づく全人教育の伝統が、文武両道の追求という形で今も生きており、進路実績及び部活動の成績の両面において優れた成果を上げることができている。科学技術が日進月歩の進展を遂げ、それを支える学問領域が学際的な方向へと深化統合している昨今、本校においても新しい学びの方法を模索することは急務である。将来の自己実現に向けて、自己教育力を身につけた、創造力・表現力豊かな生徒の育成が求められている。現代社会では、経済や社会の情勢変化に対応できる能力を身につけた人材が望まれると共に、持っている知識の量ばかりでなく、リテラシー(活用能力)の重要性が増している。

本校の「総合的な学習の時間」は、自己の興味・関心に応じて自ら課題を設定し、その課題の解決を図る主体的学習を推進すること及び自主的な研修を進めていく中で、生徒自身の自己実現を図る力・生きる力を培うことを目標とする。

そのため、主体的な学習態度を育成する上で重要な役割を担う時間と位置付け、その力が養われる時間となるよう学習計画を立てなければならないと考える。

3 「総合的な学習の時間」の主題決定までの議論

社会で有為な人材として活躍できる実力を身につけること、卒業後、地域社会のリーダーとなる人材を育成することが、本校に対する地域や保護者からの使命である。そこで、「総合的な学習の時間」を進路学習の柱に据えることは当初から決まったが、ねらいや内容については様々な議論が為された。

進路学習というと、いわゆる出口指導ともいわれる受験指導に目が向くが、人生70年、80年をいかに生きるべきかという人生観、社会に出てどんな仕事に就き社会貢献をしていくかといった職業観を養うのも進路学習である。学習指導要領の趣旨をふまえ、この点にポイントを置くことにした。しかし、問題となったのはLHRとの兼ね合いである。前橋高校では進路プランニングとして、LHRで進路学習が行われており、「総合的な学習の時間」においても、また同じようなことをするのかという議論があった。本校では、LHRの時間に、月1回以上の進路学習を行っており、比較的充実した取り組みをしている。

そこで、「総合的な学習の時間」は、**キャリアアップのバックボーンを支える時間**ととらえることにした。最近の生徒の姿勢が、受け身的な取り組みになっている一方、授業時間数が減少している。社会に目を向けると、科学技術が日々進歩発展していくなか、複雑化し、既存の学問体系だけでは対応仕切れなくなっているという現状をふまえ、「総合的な学習の時間」を、新しい学びの方法を模索する時間、将来の自己実現に向け、自己教育力を身につける時間、および創造力・表現力豊かな生徒の育成をする時間とすることに決定した。では、どのような学習内容をすればよいのか考察した。

4 「総合的な学習の時間」の主題と全体計画

生徒の内発的な学びの集団を形成し、自主的な学習能力の育成を図る意味を込めて、学校テーマを『**知のフロンティア・・・新しい学びの創造**』とした。1～3学年の各学年テーマを設け、自己の興味・関心・進路希望等に応じた問題や課題を自ら設定し、その課題解決を通し、成就感と自信を持たせる。また、自己のあり方生き方について考察を深め、学ぶ意欲の向上と学ぶ手法の体得を図り、自己実現のための能力と態度を培う。

【1年生】「**現代社会を見つめる**」をテーマに、現代社会が抱えている様々な問題や課題を自ら選び、その課題解決を通して、成就感と自信を持たせ、自己実現を図る能力と態度を培う。『日本の論点』(文藝春秋社)をテキストとして授業を行う。また、社会人(OB)講演会を開催したり、研究テーマについての「自主研修」活動(体験学習)等を実施する。

【2年生】「**自己を見つめる**」をテーマに、自己の興味・関心・進路希望等に応じた課題を自ら設定し、その解決策を探りながら、自己のあり方・生き方について考察する。「出張授業」、「大学訪問」や「企業・研究所訪問」等の体験学習を実施する。

【3年生】「将来を見つめる」をテーマに、各教科で学習した個々の知識や技能を、前年までの「総合的な学習の時間」で取り組んだことと関連づけ、学習の深化やあり方生き方についての理解の深化を図り、将来の自己を考察する。2年生までに取り組んできた研究テーマを基に、進路志望分野の課題テーマを「論文」（和文・英文）として結実させ、三年間の総合学習の総まとめを作成する。

以上3年間を通しての全体計画のもと、実施3年目の平成17年度は、第1～3学年のすべての学年で実施している。

5 「総合的な学習の時間」の内容

本校では、平成7年度から、65分授業を実施し、2週間を単位とする時間割表を編成している。2週間に1時限(65分)の「総合的な学習の時間」を実施し、この時間では、生徒個々が自己の興味・関心・進路希望等に応じた課題を自ら設定し、1年間調査研究を行い、論文にまとめ、プレゼンテーションとして発表する活動である。さらに、課題テーマについて体験学習を実施し、合わせて各学年1単位を設定している。授業時間は、テーマ別編成、調べもの学習に必要な施設の収容量、教室移動等を考慮し、学年一斉時間割とし、学年毎に曜日を変え、第5限(最終時限)を充てている。

各学年の年間計画(本校は3学期制)では、第1学期を課題発見活動として、課題テーマの設定や研究計画の検討、ゼミ、グループ編成に充てる。第2学期は課題探究活動として、自己の課題テーマについて調査研究と体験学習の事前学習を行う。第3学期はまとめと発表活動として、論文作成とプレゼンテーションを行い、1年間の「総合的な学習の時間」を結実させる。学年進行とともに進路学習の観点を強めていくように考えている。学習指導要領のねらいに問題解決能力の育成があるが、問題意識のないところに、解決能力は生まれないということで、特に、1年生では、現代社会の問題点を考えることに力点を置き、生徒の問題意識の喚起を促している。さらに、1年生では、中学校段階で様々な「総合的な学習の時間」が行われてきており、1学期は前橋高校の「総合的な学習の時間」の趣旨を理解させることに注意を払う必要がある。また、一年間の活動においても、1学期の課題発見活動が重要なポイントと考えている。テーマ設定にむけ、教師側からゼミ分野の講演を行い、投げかけ(問題意識の種まき)をする。

6 テーマ設定の条件

優秀論文集には、全生徒の研究テーマを載せている。研究テーマは、先の表に示す設定条件の下、生徒自らが決定している。

自分自身の力で問題解決が可能な、長期的な、基本的に学校内で取り組める課題、および、学術文化的な課題を設定させる。また、「総合的な学習の時間」の目的の一つに、学び方を学ぶ(スキル学習)があり、研究において、内容よりも学び方、スキル学習にポイントを置いている。

1年生の研究テーマは将来大学へ進学して学問を行う基礎をつくる観点から広い意味の進路学習ととらえるが、学年進行とともに進路学習の観点を強め、将来の進路希望を踏まえた学部系統的な色彩を強めた進路学習を進める。

7ゼミ、グループの編成

生徒の研究テーマは多岐にわたっている。高校生らしい新しい感性に富んだテーマのものから、現代社会についての高度な問題や最先端の科学技術に取り組んだものまで、様々な研究がなされた。ユニークな感性、視点、考察があり、前高生の非凡な能力を、提出された論文からうかがい知ることができると思う。「優秀論文集」には、その中から、特に力作を集めた。たとえば、今年度は、文化祭で保護者に「総合的な学習の時間」を紹介する機会を設定したが、最もお母さん方に好評だったものは、1年生の「ハゲの研究」であった。ハゲのパターンや禿げる要因等をまとめたものである。コンピュータープログラムの解析など、評価する側の教師が判断に苦慮するような高度な内容の論文もある。年度末に提出される論文は、A4サイズ(40字×40行)で6～7枚程度、長いものになると15枚に及ぶものがある。

多岐にわたる生徒の研究テーマに対応するため、各学年に、ゼミ、さらにその中にテーマの近い生徒によるグループの編成を行っている。調査研究ではグループ内での研究議論を深め、互いに刺激しあえる集団作りにつとめるため、ディベート、討論会や中間発表会等を織り交ぜている。課題テーマの研究という縦糸に対し、これら議論の場を横糸として絡め、活動を活性化するねらいである。個人研究ではあるが、**生徒の内発的な学習集団**が、生徒個々の成長を促すと考えている。また、自主研修活動ではグループ活動を行う。訪問先決定などの事前研究から研修のまとめまで、グループ単位で行う。学年所属の教員数、教室数等を考慮し、**学年あたり10前後のゼミを基本**とする。1ゼミあたり20人～40人を標準とし、2、3年次にゼミの組み替えを行う。**各学年に所属する担任団が、ゼミ担任という形でこの生徒集団を指導**していく。

1つのゼミは20～40人を基本とするが、1年生に比べ2年生ではアンバランスが生じやすい。これは、本校は理系進学希望者が多いため、2年の物理系では、さらに細分化し2～3つに分割して授業を行っている。

3年生では、小論文指導を中心に据えており、その都度テーマ別編成で行っている。進路選択の微妙な段階に差し掛かり、固定的なゼミ所属を避けた。小論文の書き方指導を行ったうえで、それぞれの進路分野で話題となっている問題について、基本的な見識や自己の見解をもたせることに主眼を置いている。演習と評価をセットに、3回の小論文指導を行う。さらに、日本語小論文の他に、**英文での小論文**の提出を求めている。

8体験学習の内容

体験学習の内容は右のようなものである。1年生の**社会人講演会**は主にOBを講師に招

いている。1年生の**自主研修**は修学旅行の一日をあて、関西地区の大学企業研究所を訪問する。「総合的な学習の時間」の導入にあわせて、修学旅行先を沖縄から関西に移した。2年生も同様の内容で、首都圏周辺を対象に訪問している。初年度、関西地区の研修で、生徒の感想が一番良かったものは、裁判所の公判の傍聴であった。パチンコで身を崩し窃盗事件を起こした中年男性の裁判であった。また、理系進学希望者の多い本校ではあるが、研究者の様子を日常的に、目にすることがないため、理系研究所を訪問して初めて、漠然とした研究者のイメージがはっきりしてきたという感想が多く見られた。研究所を訪問したとき、まず、大会議室でPRビデオを見せられることが多いのだが、それでは生徒は満足せず、実際に研究者とお話をする、実際の研究の様子を見ることをお願いしている。それが若くきれいな女性研究者なら、なお満足するといったところであろうか。

前橋高校の恵まれている点は、こういった機会に相手先のご配慮もあって卒業生が対応して頂くことが多いことである。卒業生であり、生徒の様子を理解してくれ、特別な配慮をしてもらうことも多い。

生徒の希望に応じ、小数グループで多くの訪問先を訪れる高校もあるようであるが、本校では、あえて、ゼミ単位の訪問を基本としている。これは、訪問のアポを取ることを大変さ、貸し切りバスを利用し交通費の負担の軽減を図る意味もあるが、教師が引率し、大人としての扱いを受けたいからである。訪問先も貴重な時間を割いての受け入れであり、失礼があってはならない。実際に訪問し、マエタカの名が周知されていることに驚く。昭和40年代後半に、深夜放送で前高高定期戦を聞いていた世代が、社会の重要な役職につかれていることを感じる。このような**体験学習では本物を見ることの意義**を強く感じる。

9 「総合的な学習の時間」のねらいを実現させるための指導と評価の工夫改善

(1) 推進組織と指導体制

本校の「総合的な学習の時間」は、平成12年度より3年間をかけて、**総合学習研究推進委員会**が企画立案を行った。当初は、1～3学年と教務、進路、特活の3分掌の6人の代表と教務主任による構成であったが、現在は3つの学年から2人ずつの6名と委員長(筆者)、教務主任で構成する。

この総合学習研究推進委員会が、「総合的な学習の時間」の校内での推進組織となり、当該学年と連携しつつ、様々な校内分掌との連絡協力提携のなか運営している。

各ゼミは、**各学年**の教師集団が、ゼミ担任となり運営する。

出欠簿作成等の出欠席の管理統計、年間授業計画、総合的な学習の時間研究計画書(研究テーマ選定理由書、学習記録表)報告書等の準備は、**教務部**と連携して行う。自主研修(企業研究所・大学訪問)や外部講師による啓発的な体験学習(社会人講演会、大学出張授業等)の準備は、**進路指導部**と連携して行う。

また、講師については、**渉外部**との連携のもと、同窓会・PTAへ依頼することや群馬県が行っている「出前なんでも講座」などの活用をはかる。

「総合的な学習の時間」には、調べもの学習の側面があり、**図書部**や**教育情報部**と参考文献や資料の準備や情報機器の活用で連携していく。「総合的な学習の時間」の目的には、学び方やものの考え方、問題解決能力を身につけることもあり、教育情報部とともに新教科「**情報**」とも連絡調整をはかる。

総合学習研究推進委員会の初期の大事な仕事は、「総合的な学習の時間」の企画や内容検討はもちろんであるが、教職員に対する広報活動だっと思っていた。未知の授業に対する不安を払拭し、教職員の共通理解と指導の統一性を図らなければ、有効な教育活動にはならない。そのため、適宜、右のような「**総合学習だより**」を発行し、全教職員が「総合的な学習の時間」に共通の認識をもち協力体制をつくるよう努めている。導入初年度には、共通理解を図るために、該当学年団だけでなく全教員に1時間ずつ「総合的な学習の時間」を担当して頂いた。実際に生徒を指導する先生方に負担感を抱かせないようにすることに注意を払ってきた。学習指導要領を踏まえつつも、生徒の興味関心と遊離したものになっては、自発的・主体的な活動にはならない。また、学年、学校全体の先生方の協力を得なければならず、明確な方向性を示し、負担感や徒労感を先生方に与えないような指導計画を模索してきた。また、能力の高い前橋高校の先生方の意見をできるだけ取り入れ、生徒のみならず教職員全体が「総合的な学習の時間」を担っているという達成感をもてるよう心掛けてきた。それが、生徒に活動の意義を理解させることになり、やる気を生み、生徒の高い資質から、予想以上の成果をあげてきている一因である。

(2) 総合的な学習の時間の評価

「総合的な学習の時間」の評価は、教育課程審議会答申をふまえ、試験の結果によって数値的に評価することはせず、活動や学習の過程、報告書や発表などに見られる学習の状況や成果などを評価し、意欲や態度、進歩の状況をふまえて評価する。このため、本校では、**ポートフォリオ評価法**を実施している。

生徒の一定期間の学習活動の履歴をできるだけ多く収集し、生徒の学習活動の全体像を把握するとともに、生徒の伸長や変容を見ようとする評価法である。各時間ごとの自己評価や資料を全て1冊のファイル『**個人研究計画書**』に保存していく。日常の学習過程において、あまり綿密な評価を行おうとすると、評価そのものが負担になり、かえって学習の障害になりかねない。したがって、その時間のグループや個人の学習が記録され、担任や担当教員がそれを確認して、意見や助言、感想として学習ノートや記録などの形で生徒にフィードバックできるようなシステムを考えた。簡単な文章であっても、活動を記録することが『自己評価』、『相互評価』の原形になっていき、その積み重ねのうえに中間・まとめの総括的な評価が可能になる。また、記録することによって、グループや個人の活動が意識化され、形成的な態度を育てることにもなる。具体的な各時間ごとの評価資料として、次のようなものを実施している。

- ① 研究テーマ選定理由書（1学期をかけて指導し、テーマ決定後に記入提出）
- ② 各時間ごとの学習記録表

- ③ 自己評価票（各学期・年度末）
- ④ 講演会のまとめ（進路講演会等の感想記録）
- ⑤ 相互評価票（他者の発表・論文に対する評価）

これらの資料と研究過程で使用・作成した資料をすべて『個人研究計画書』にファイリングしていく。生徒は毎回授業後に提出し、担当教諭のチェックを受ける。

評価は**個人内評価**を行う。

- ① 学習内容に興味・関心がもてたか（関心・意欲・態度）
- ② 課題を発見し、調査研究することができたか（思考・判断）
- ③ 調査・研究を分かりやすくまとめることができたか（知識・理解）
- ④ 発表や討論に参加できたか（技能・表現）
- ⑤ 新たな発見があり、自分自身の考えを持つに至ったか（自己の生き方在り方）

以上の観点に基づき、生徒自身が毎回の授業で、活動内容とともにA～Dの4段階（Aが良い）で自己評価する（ポートフォリオ）。担当者はこれらの様々な資料を参考にし、**絶対評価**をする。

10 「総合的な学習の時間」のねらいを実現させるための指導上の理念

本校の「総合的な学習の時間」は、自己の興味・関心・進路希望等に応じた問題や課題を自ら設定し、その課題解決を図り論文にまとめていく主体的な活動である。

平成15年12月に、学習指導要領が一部改訂された。5つ程ポイントがあるかと思うが、どれも、計画段階から注意を払ってきたことばかりである。生徒の自主的主体的な活動であり、画一的な指導をしないなかで、教科指導のプロである教師がいかに持てる知識、指導力を発揮して、生徒の学習意識を喚起し、いかに主体的な態度を育成できるかを考えた。

入学後の生徒の前橋高校の授業感想は、中学時代優秀な生徒が集まった集団ではあるが、レベルが高く速いと言う。教科指導が日々高いレベルで行われており、その中で「総合的な学習の時間」が休憩の時間になってはいけない、生徒をスポイルするような時間になってはいけないというのが最初の出発点であった。

目標、ねらいを明確にし、3年間の全体計画を立て、教科で学んだことをさらに発展させていく学習姿勢をつくっていくことに注意を払って指導計画を立てている。まだまだ、試行錯誤の連続であり、創意工夫をしていかなければならないと思う。

11 本校の「総合的な学習の時間」の授業運営上の課題

生徒の主体的な活動ということで、研究テーマは生徒の自由な発想を認めている。そのため、多様な研究テーマが設定されている。これを、自然クラスのまま一担任が対応することは非常に難しいものがある。そこで、学年一斉時間割のなかで、研究テーマにより、ゼミの編成、さらにグループの編成を行っている。これによって、教師の専門性を生かし、

さらに調査研究ではグループ内での研究議論を深め、互いに刺激しあえる内発的な学習集団作りにつとめているわけである。

しかし、学校の先生は、国語、英語等人文系の先生が多く、逆に法律や経済を専門とする先生は少ない。また、本校は、理系希望の生徒が多い(文系3クラス、理系5クラス)ため、生徒の設定テーマと教師の専門分野のバランスが一致しない。必ずしも、専門知識を持つ教師をゼミ担任に配置できない場合もある。初年度の1年生の物理工学系ゼミは、車好きの英語の先生にお願いした。**先生が、生徒とともに、課題に対し一緒に考え取り組むという姿勢が大切**なことであり、このような先生方の努力に支えられている。

ゼミを編成するために、学年一斉時間割を設定しているが、逆に、調べもの学習の側面で問題が生じる。図書館やコンピューター室の収容量には限界がある。論文作成におけるコンピューター室の使用では授業交換のやり繰り等に苦慮している。

大学企業研究所訪問等の体験学習では、本物を見ることの意義を感じている。裁判所での公判を実際に傍聴した生徒の感想は衝撃的なものであり、理科系研究所の見学では、漠然としていた研究の有様を実感することができたという感想が多く、有意義な活動と思う。しかし、訪問先や外部講師の事情等もあり、生徒の興味関心を必ずしも十分に満足させられないこともある。本校は伝統校であり、立派な卒業生のご協力を得ることができる大きな財産があるが、良質な訪問先、講師の選定が課題である。実施後には、生徒にアンケートをとり、次年度への参考資料としている。

本校は、県より約20万円の予算措置を頂いているが、体験学習等では、予算的な問題が絶えず付きまとう。

また、本校では「総合的な学習の時間」を隔週で実施しているため、学校行事等で間隔があく場合があり、年間計画を作成する際には十分注意する必要がある。

12 本校の「総合的な学習の時間」の特徴

前橋高校の「総合的な学習の時間」の特徴をまとめると、次のような点が上げられる。

- ① オーソドックスかつアカデミックな内容である。
 - ―群馬県内の高校はもちろん、全国的にも、学習指導要領に最も準拠した内容であり、生徒全員が論文を作成し、プレゼンテーションを行う。
- ② ねらい理念が明確であること。
 - ―導入初年度から約10ページからなる指導計画を作成し、3カ年の全体計画のもと実施している。
- ③ プロジェクトチームのもと職員の協力体制が構築されている。
 - ―実施3年前から準備し、個人運営ではなく、組織運営のなか、教職員の周知徹底を図った。
- ④ ポートフォリオ法の活用・・・評価の手法。
 - ―ねらい理念が明確であるから、教師側の評価が平易であること。さらに、ポート

フォリオ法を活用し、自己評価、生徒相互評価を繰り返しつつ、生徒の学習集団を形成することによって、教師の負担を軽減し、全体として活力ある「総合的な学習の時間」につながっている。

⑤ 体験学習の内容がアカデミックである。

――立派な大学、企業、研究所を訪問し、生徒の啓発につながっている。国公立大学も独立行政法人化が進み、以前より受け入れを歓迎する方向にある。本校の訪問を大学のホームページやパンフレットに紹介して頂いたりしたことが、さらに、生徒のやる気につながっている。

13まとめ

平成12年に準備作業を始めた頃は、前橋高校の「総合的な学習の時間」が高い評価を得るようになるとは夢にも思わなかった。そもそも、「総合的な学習の時間」とは何なのか、まさしく、暗中模索の出発であり、参考にすべき文献も、当時、小中学校を対象とした物は多々あったが、高校を対象とする物はほとんどなかった。わずか2～3冊あった本を読んではみたものの、これを進学校である前橋高校の生徒にさせたいとは思えなかった。生徒の、資質・能力、発達・学習段階、興味関心等を踏まえたうえで、内容を設定しないと、逆に、生徒に対して、負の教育効果を与えるのではないかと思った。

平成16年度の文部科学省での事例発表では、発表時間の倍近い時間、質問攻めにあった。『本当にこのような内容の「総合的な学習の時間」をしているのだろうか?』といった質問から始まり、最後には、『これだけしっかりした内容の「総合的な学習の時間」を行って、生徒の学力は維持できるのか』といったことに関心が集まっていたようである。前橋高校レベルの他県の進学校では、「総合的な学習の時間」を教科指導に読み替えている実態もあるようである。また、学習指導要領の趣旨を逸脱し、「総合的な学習の時間」が学校行事によって消化されていたり、LHRの進路学習と区別が付かないような状況になっている学校も多いと聞く。そういった学校では、「総合的な学習の時間」のねらいが明確でないから、教師も日々の授業の準備運営に苦慮し、生徒にとっては、目的がわからない授業になり、生徒を評価することもできないという悪循環に陥っていく。そして、教師も生徒も負担感や徒労感のみが残るといった雰囲気もあるようである。

前橋高校の進路実績は、年々充実しており、様々な模擬試験で、公立高校では全国的にもトップクラスの成績を上げている。この進路実績を踏まえ、年間20校程度の全国の高校が学校訪問のため来校するが、今年は、「総合的な学習の時間」についての訪問依頼もある。埼玉県教育委員会、東京都教育庁と教育行政からの訪問もあった。また、栃木県教育委員会に招かれ講演もした。このような反響の大きさに私自身が驚いている。

世間では、学力低下問題が叫ばれ、ゆとり教育の象徴として「総合的な学習の時間」に批判があるが、本校がこのような成果を上げているのはなぜだろうか。生徒が文武両道に励む学校環境にあると思う。勉強だけでなく、部活動を含め**何事にも一生懸命取り組む、生徒の姿勢**である。本校の「総合的な学習の時間」の内容が、すぐに学力の向上に直結すると

は思えないが、大学に進学後、こんなはずではなかったという感想を持つことはないであろう。こういった**将来の進路希望の周辺について調べる**ことが、**生徒の知的関心を刺激し、学習意欲の向上に結びついていく**のではないだろうか。

優秀な学力を維持しつつ、さらに学習に対する意欲関心を高め、将来の生徒の自己実現を促す学習活動であるべきである。従来からの**教科学習で培う学力と新しい時代を創造するための学力(主体的な学習力)**は、**方向の異なるものではなく、互いに補完しあい、相乗的な効果をあげつつ、最終的に生徒自身の自己実現に寄与するもの**でなければなりません。

前高生には新しい時代を切り開き、創造していく気概と学力を身につけ、社会で羽ばたく礎を培って欲しいと思う。本年度は、導入3年目となり全学年での実施という完成年度を迎えた。「総合的な学習の時間」の第一期生が、平成18年春には卒業する。「総合的な学習の時間」が、生徒の将来の自己実現にいい影響をあたえてくれるものと信じている。

最後に、この「総合的な学習の時間」を実践するにあたり、助言や協力を頂いた先生方に感謝いたします。

参考文献 高等学校学習指導要領解説 総則編 (文部科学省)
高等学校「総合的な学習」の運営と実践事例 工藤文三(国立教育政策研究所)編

この論文は、平成18年群馬県総合教育センターより、
第3回21世紀ぐんま教育賞あすなろ賞(教職員の部)最優秀賞を受賞いたしました。